

ここに愛が

「ヨハネの第一の手紙」4章7～12節までを朗読。

10節「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」。

神様は私たちが造り、森羅万象、あらゆるものを存在させて下さるお方、創造者、造り主でいらっしゃることは、よく聞いている事です。また世間でも、聖書に限らず大自然などを見ますと、そこに人間の知恵や力を超えた、言いようのない力が働いて、こういうものが出来てきたに違いないと、ふと思うことです。それを神と呼ぶかどうかは別として、そういう超自然的な力の存在を多くの人は感じます。旅番組を見ていると、不思議な現象を体験したり見たりするツアーが紹介されています。昨日、南米の事を紹介している旅番組をみました。どうしてこんなところに、こんなものが出来たのだろうか、不思議な形をしたもの、巨大なものがあったり、降るような満天の星空を眺めて、吸い込まれるような思いをすると、レポートをしている人が感動していました。確かに、人の知恵や人の力、人のわざを超えた大きな力が働いていることを感じるの、よく分かることです。

以前、一人の方が、イエス様の救いにあずかった時のことです。最初の時、「神がいますことを信じますか」と問いまし

た。その方は素直に、「私も神様がいらっしゃると思う。子供の時、田舎で育って、夕暮れ時になって、西の空が赤く染まっていく。日が沈んでいく様子を見て、遠くの方に星が輝き始める。その昼から夜に変わっていく黄昏時をみていると、寂しさと同時に、何か不思議な力がそこに働いている。神秘的な思いにとらわれて、感動したことがしばしばありました」と言われました。すべてのことの背後に、神様と言われる、力ある方がおられることは私も信じますと言われました。実に素直な方で、なるほど、そうだろうなと思いました。日本人は、汎神論的な宗教心があります。どんなことにも、神がいますと信じる。長野県の安曇野の方に行きますと、小さな道祖神が、道々、角々に、いろいろな所に飾ってあります。何の神様であるのかわかりませんが、何か不思議な力が宿っていると感じる。それをあらかず行為として長年続けている。これは日本人の信仰の土壌でもありますね。どんなものにも、何かいのちがあるというとらえ方をします。確かに、神様が万物の造り主であると、聖書を通して語られていることですが、それについては誰も異論がない。神様は、全能の力、絶対的な力をもって、創造者であり、造り主でいらっしゃる方。その神様は、すべてのものをすべ治めたもうお方であることを信じます。

ところがその神様は、私たちにいろいろな事をなさる。良い事もしてくれれば、悪いこともなさる。だから触らぬ神にた

たりなしと、できるだけ神様は近くにいない方が良く、へたに触るととんでもない仕返しを受けると、そういう怖い神様ですね。日本人には、神様は万物の創造者、すべてのものを造る、力あるお方としての神様。それと同時に、神様は義なるお方、さばかれるお方だというわけです。すべてのものをすべ治めて、善し悪しを決めて下さる。だから神様は一人一人の行動や言葉や様々な事を見て、それを必ずさばかれるのです。それは仏教説話などからも教えられてきたことです。だから不思議なもので、小さな子供ですら、そういう事を口走ります。こんなことをしたらばちが当たる、何か咎められるのではないかという気持ちを持つ。誰が教えたというわけではないけれども、生活の中でいろいろな情報がありますから、友達から聞いたり、昔話を讀んだりして、因果応報、良い事をしたら報われる、悪い事をしたら罰せられるという道徳的な教えが、人の心に入ってきます。神様は、時によく分からない罰を与えられる。時には理不尽な事もなさる。ですから、神様に守っていただきたいくはあるけれども、怒らせてしまうととんでもないことになるから、出来る限り、神様は遠ざけて、用事のある時だけ祀ろうとします。だから、いつも神棚は人目につかない天井のほうにあるというわけですね。目の前に置かれると困る。おそらくそういう気持ちがある。そういうさばきをする怖い神様。確かにそれは一つの倫理的な、自らの行動や生活の規範として、そういうものがあること、神様がいらっしゃると信じることは大切です。それが今

の時代は失われてしまったと言っていると思いますね。最近はそういう事を言わなくなりました。子供を教育する時、「そんなことをしたら、お天道様が見てるよ」と、昔はよく言ったものであります。お天道様が誰であるか分かりませんが、とにかく何か怖いものがある、なすことを見ている。万物の創造者、すべてのものをさばかれるお方、怖い神様と考える方が多くいます。ところが、もう一つ、聖書が私たちに証しているのは、8節に、神は愛であると、聖書を通して語られています。

世界にはいろいろな宗教がありますし、神々と称するものがありますが、おそらく、神は愛であるとの教えは、聖書を通してしかありません。ヒンズー教などは愛の神様、しかしその場合の愛は、たいがい肉欲的な愛でありますから、人間世界の話です。ところが、聖書が語っている愛とは、神様ご自身が愛なるお方であるということです。だから神様のすべてのわざの動機は愛です。神様のご性質が愛であるということです。そしてその愛はどこにあるか。10節に「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」。神様は森羅万象、ありとあらゆる被造物を通して、ご自身の、全能者であり、力あるお方であることを証しなさいます。またいろいろな事柄を通して、因果応報と言いますか、それぞれにさばきをなさる、強い、怖い、力ある神様であるということ

も、確かであります。

しかしそれと同時に、神様は愛なるお方である。そしてその愛は、この10節に「**罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある**」と言うのです。神様が尊いひとり子イエス・キリストを、この世に遣わして下さった。それは何のためにか。私たちすべてのものが神様に造られながら、造り主を忘れて、身勝手な歩みをしてしまった結果、神様の祝福と栄光を受けることができない。罪と咎に死んだ者となった。何の役にも立たない。神様の心になかないものとして、滅ぼされて当然のものとなった。そのような私たちのために、罪のあがないとして、罪なきお方、ご自身の御子でいらっしゃるイエス・キリストを、この世につかわして下さった。その動機は何か。神様がなぜそんなことをしてくださるのか。それはひとえに、被造物、造られた者である私たちを愛してやまないからです。神様は私たちをご自身に似た者として、創世のはじめに造られました。神のかたちにかたどって、尊いもの、大切なものとして造られた私たち、神様の恵みを忘れて、その手から外れてしまう。闇の中に落ちて、罪と咎とに死んでしまう。だったらそれで終わり、これで捨ててしまえと言われるのではなくて、あえて、そういう私たちを惜しんで下さったのです。あわれんで、何とかして、創世のはじめの、人と神が何一つ妨げることのない交わり、愛にある関係に造り替えたい。愛する者と愛される者、神様の愛を受ける者、この関係に

したい。その具体的な神の愛の証し（証拠）として、神様があらわして下さったのが、10節にある通り、「**わたしたちの罪のあがない**」です。私たちは神様に罪を犯し、神様を離れて、わがままで、自己中心の、身勝手な、己を神とする生き方に落ち込んでいた私たちをあわれんで下さって、もう一度、神のものにしようと、私たちの罪のあがないを成し遂げて下さった。その動機は愛です。私たちは自分で自分の罪をあがなう、それをきよめることはできません。

罪を犯した者が、神様に何をささげようとも、いのちをもって償おうとしてもできません。罪なる者がどんなことをしても、何の値打ちもないわけです。神様の前に犯した罪を、取り除く道はただ一つ。罪なき者がその罪を負う。これ以外にない。そうしない限り、赦される道がない。死んで、お詫びしますと、死んだら、それはそのまま、永遠の滅びであります。それは救いにはつながりません。罪人がただ罪に死んだだけに他なりません。そこで神様がとって下さった愛のわざ、これが十字架です。ご自身のひとり子であるイエス様を遣わして下さった。罪なきお方、何一つ罪を犯したことのなのお方であった。そのお方が、私たちの罪を、すべて負って下さった。私たちのために、十字架にのろわれて下さった。いのちを絶たれて下さった。まさにこれが神様の愛です。徹底した贖いであります。そのことが「エペソ人への手紙」にも記されています。

「エペソ人への手紙」1章3～6節を朗読。

4節「みまえにきよく傷のない者となるように」、言い換えますと、罪と咎とに死んでおった私たちの、一切の罪、咎、汚れ、不義なるもののすべてをきよめて下さる。そのために、「天地の造られる前から」、まだ私たちがこの地上に、姿かたちの何一つなかった時、すでにキリストによって、私たちにこの恵みを与えようと、神様が選んで下さった。そして5節に「わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと」、私たちの罪を取り除いて、きよめて下さるばかりでなく、神の子供として下さる。今度は新しい、神様との愛によって結ばれた親と子の関係、そこに私たちを取り込んで下さった。「御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである」。「御旨のよしとするところ」、言い換えますと、そのことが神様のみこころであると決めて下さった。仕方なしではない、やむなくではない、神様はむしろ喜んで、御旨のよしとすることによって、愛をもって私たちをあらかじめ定めて下さったのです。

ですから、今、私たちは神様の愛のゆえに、もはや罪を咎められることのない者として、義なる者として、神様は受け入れて下さった。もう一つ、先のところを読んでおきたいと思います。

「エペソ人への手紙」2章12～16節を朗読。

何と徹底した神様のみわざではないでしょうか。かつては神様に縁のなかった者、恵みから遠く隔たって、滅びに定められていた者たちが、一方的な神様のあわれみにあずかって、神と人との間を隔てていた、敵意の中垣、その障害を、全部、十字架に処分して下さった。そして私たちに神との平和を得させて下さった。神との和らぎを与えて下さった。神様と共に生きることの出来る者として下さった。

神様は、私たちを愛してやまないお方です。「ひとり子を賜ったほどにこの世を愛して下さった」と、「ヨハネによる福音書」3章16節に記されていますが、神様は私たちを愛してやまない。そして今も、私たちを愛しておられるのです。しかし神様の愛を、かたちあるものとして、手で触ることはできません。形として、神様の愛を見ること、知ることができない。そのため、失敗を繰り返しているのです。日々の生活の、どんなことも、神様の手によらないことはないのです。ということは、神様は、愛をもって、私たち一人一人に、一つ一つ、どんなことをも備えて導いていらっしゃる。どんな境遇であろうといつも神様の愛を信じていく。十字架、そこにこそ、神様の愛があるのです。

「ヨハネの第一の手紙」4章10節に、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物と

して、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」。私たちの罪のためのあがないの供え物となったイエス様が、十字架にいのちを断たれて下さった。私たちが受けるべきのろいのすべてを、イエス様が負うて下さって、砕かれたのです。それはただ、神様が私たちが愛して下さったからです。神様の愛、これはどんなことがあっても失われることがない。消えることのないものであります。ひとり子を惜しまないほどに愛して下さる神様は、私たちに善きことをして下さらないはずがない。神様の愛が、どんなに大きく、深いものであるかを、良く知りたいと思えます。ただ単に、自分の願いが叶う、自分の思いが遂げられる、神様は私の言うことをなんでも聞いて下さる。そこに愛を求めようとします。しかし、神様の愛はそこにはないのです。万物の創造者であり、また私たちが造り、生かし、生活の隅から隅まで、一つ一つ、事を導いておられる神様こそが、限りない愛をもって、私を愛し、恵もうとして下さる。ここに絶えず思いを向けていく。心をそこに掛けていかなければなりません。その証しとしての十字架でありますね。

十字架は、2千年前の出来事のしるしではありません。今、私たちの生きている生活の真っ直中に、そこに十字架がある。それは「神は愛である」という証しです。だから、たとえ日々の生活に、どんなことがあっても、問題や、悩みの中に置かれようとも、神様のご愛から離れることはできません。ともすると、神様はいつたい何をしようとしているのだろうか、

どうしてこんな目に遭わなければとつぶやきたくなることはいくらでもあります。だからと言って、神様の愛を疑うわけにはいかないのです。

思いがけない、願わないような、苦しい事、辛い事、悲しい事に遭う時こそ、その背後に、一番奥に、十字架が立てられていることを、愛が、神の愛がそこに注がれていることに、目をとめていく以外にないのです。神を信じるとは、まさにこのことです。神は愛である。これを徹底して信じていく時、「どうして」、「なぜ」ということが、今は分からない、今、こんな目にあって、こんなことに会って、「どうしてこうなったのだろう」、「あんなったんだろう」、その理由はわかりませんが、しかしそうであっても、なお、神は愛である、神様、あなたは愛なるお方であって、愛のみわざをもって、私をあしらって下さる、恵んで下さると、ここを信じていきたいと思えます。神様は、全能の力をもって、私たちに臨んで下さいます。どんなことでも、お出来になります。そのお方が、あえて今、私に「この道を行け、この事を負え」、あるいは「受けよ」ということがあるのであれば、背後に隠されている神様の十字架の御愛を信じて、徹底して、それに自分をかけていきたい。

この十字架を忘れるのですね。そして目の前の事ばかりに、思いがとらわれて、つぶやいたり、嘆いたり、悲しんだり、憤ったりしやすいのです。いつも、どんな時にも、常に主の十字架を見上げて、

「神は愛である」「神様は愛をもって私に今このことをして下さっている」と、そこにこそ、私たちの望みがあり、また慰めと力がわいてくるのです。神様のご愛にすぎなければ、到底耐えることができない。それを乗り越える力はありません。だから、どんな時にも、常に十字架を仰いで、「こんなものをも愛して下さる主がおられる」、「主よ、あなたは愛なるお方です」と、徹底して、自分を委ねていきたいと思えます。

「哀歌」3章21～23節を朗読。

「しかし、わたしはこの事を心に思い起す。それゆえ、わたしは望みをいだく」と言われています。3章1節からを読みますと、そこに大変な苦しみを受けた人のことが語られています。哀歌を歌ったエレミヤであったと思いますが、彼は様々な苦しみに遭います。時にはもうこれで終わりと思うような中におかれます。そしてその悩みと苦しみの中で、失望落胆し、絶望の中に追い込まれていきます。19節、20節には、「どうか、わが悩みと苦しみ、にがよもぎと胆汁とを心に留めてください。わが魂は絶えずこれを思って、わがうちにうなだれる」とあります。絶望的、何一つ望みが得られない、逃れ道がない、そういう絶望的な中におかれた時、ただうなだれるだけしかない。

ところが、その後の21節に、「しかし」とあります。たとえそんな状況の中にあっても、わたしは心にこのことを思い起す。一つの事を思い起すと、望みを抱

く。そこから望みが開けてくる。その後の22節、「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない」と。自分が受けているどんな苦しみの中でも、辛いことでも、いのちを断たれるばかりの、まさに風前の灯のような中におかれる時でも、そこで一つの事を思い起す。思い起すことは、たとえこの中にあっても、主のいつくしみ、慈愛、主のあわれみ、言い換えると、神は愛である、神様は愛してやまないお方であることを思い起す時に、望みがわいてくるのです。これが私たちに、今、与えられている神様の恵みであります。どんなことの中におかれるかわかりませんが、どうぞ、じたばたしないで、うろたえないで、十字架の主を見上げて、神様はの中で、私を愛してやまないお方、また「ローマ人への手紙」では、「どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(8:32)、と言われます。神様はどんなことでもして下さるお方、ところが今、私にこのことを与えておられるのは、神様が私を愛して下さるゆえであると、神は愛であると、どんなことの中にも、しっかりとそこに立っていかなければなりません。これが私たちの力だからです。世の人々が、「もうあの人はダメになる、もうこれで、後はおしまいだ」と言われる境遇に、たとえおかれようとも、「大丈夫、主が私を愛して下さっている。神は愛である」と、そこにいつも思いをしっかり向けていく。その時、たとえ事情境遇、周囲の事が変わらなくても、私たちのうちに、神の愛が注がれてくる。そして力がわいてくる。望みが与えられ

る。どんなことにも、耐えることができ、それを乗り越えることができる力を、神様は注いで下さる。

常に十字架の主の御愛に絶えず立ち返っていく。そうしなければ、いつまでも目の前の事ばかりに思いを奪われて、思いはズルズルと闇の中に引きずり込まれて、自分がどこにいるやら、皆目、分からなくなってしまう。そうならないために、21節に言われるように、「わたしはこの事を心に思い起す。それゆえ、わたしは望みをいただく」のです。この哀歌を歌った人の望みはどこにあったのか。それは「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない」。いつくしみがあり、あわれみがあるなら、どうしてこんな目に遭わせるのだと、人はすぐに身勝手な事を言いますが、私たちのすべてのことは、神様がみこころによって備えておられることですから、そこで、「神は愛である」、「神様、あなたが私を愛するゆえに、この苦しみにおかれているのですね」と、主の愛にすがって、望みを得ていきたいと思います。神様は私たちに力を与えて、なお、新しいわざを進めて下さるからです。

「ヨハネの第一の手紙」4章10節、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」。ここに愛があるのです。イエス様の十字架を絶えず見上げ、自分もキリストにあって死んだ者であり、どんな状況、

どんな苦しい境遇であろうと、主よ、感謝しますと、主の愛に絶えず心に向け、思いを向けて、慰めと望みと力を与えられたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。